慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 「さまよえるオランダ人」伝説考 |
| Sub Title | Die Sage vom fliegenden Holländer |
| Author | 荒井, 秀直(Arai, Hidenao) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 1968 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.316- 333 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 英語英文学・独語独文学特集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0316 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「さまよえるオランダ人」伝説考

荒　井　秀　直

航海の途中嵐に会い，神を呪ったため神罰をうけ，最後の審判の日まで永遠に海をさまよわなければならないオランダ人の伝説は，おそらく世界中で最も広く知られている伝説の一つであろう。特に19世紀に入って，ハウフ，ハイネ，ヴァーグナーの手により潤色されてからは，単に船のりの間だけでなく，あまねく知られるようになった。しかし，古くからの云ひ伝えや迷信が混り合い，変形しながら今日にまで伝わるさまざまなオランダ人の物語の源は，依然として不明のままになっており，古い型へ遡のぼってゆくことも不可能な状態である。一説によれば，この伝説は1600年頃成立し，17・18世紀のオランダ人船員の間に語り伝えられたが，今日では消滅したということである[(1)]し，また別の説によれば，この伝説は17世紀はじめまで遡のぼることが出来るという[(2)]。しかし，これまでの研究にもかかわらず，全貌が明らかとなるにはほど遠いと云わねばならぬ。またオランダ人を永遠のユダヤ人，アハスヴェルスにたとえることは多くの書物に見られるところであるが，伝説としての比較考察を行なったものは，私の知るかぎりいまだにない。資料の発見や研究等，すべては今後にゆだねられているが，ヨーロッパ各地に伝わるオランダ人および幽霊船の伝説を集めたものとして，1893年 Wolfgang Golther が Bayreuther Blätter に発表した Die Sage vom fliegenden Holländer は，その古さにもかかわらず，資料蒐集の成果として，今日なお価値を失っていない。ここに収められた二八篇の物語に基づき，あくまでも仮説ではあるが，オランダ人伝説の流れ

を追って，19世紀ドイツ文学に至る経過を考察してゆきたい，

## 1. 罪とその罰としての放浪

罪を犯しあるいは罰をうけて放浪するという物語は非常に古い。我々はまずホメロスによるオデュッセウスを思い浮べるであろう。トロイアの戦いに勝ったオデュッセウスは，帰途ポセイドンの子，一眼巨人を盲にしたためポセイドンの怒りにふれ，10年間海上をさまよわなければならないのである。魔女カリプソ，キルケ，あるいはセイレネスをめぐるオデュッセウスにさまよえる人の姿を求めようという考え方は，従来しばしばオランダ人と結びつけて説かれてきた。これはオランダ人の伝説に永遠の憧憬の象徴，あるいは満たされることのない欲望というテーマを見出した結果であるが，この見地からすれば，ギリシャ神話にもう一つの流れを遡のぼることができる。すなわち，プリュギアの王，タンタロスの物語である。

タンタロスは巨万の富を有し神々に愛されていたが，地獄に落ち永劫の罰を受けた。池の中に立たされた彼は首まで水につかるが，喉がかわいて水をのもうとすると水がなくなり，空腹のため頭上の樹の実をとってたべようとすると枝は遠ざかり，常に飢えと渇えとに苦しめられる。一説には，大石がまさに落ちんとしてかかり，常に圧しつぶされる恐怖におののいているといわれる。その原因となるものは，神々の食卓に招かれた彼が，その時の秘密を人間にもらしたとも，神々の食事を奪ったとも，我が子を殺して神々に供したともいわれる。

我々が永遠の憧憬とか満たされることのない欲望というテーマを考えるとき，まずファウストやドン・ファンが文学史に登場する時代を思い浮べる。この時代にオランダ人伝説も人々の興味をひき，同じようなテーマと理解されてから，あるいは人間性の問題として，あるいは芸術家の問題[(3)]としてとりあげられたことは十分に理解できるものではあるが，この伝説のいわば近代的な解釈から発してその考え方を伝説の発生にまで及ぼそうとするには飛躍があると思われる。オデュッセウスやタンタロスに永遠の憧憬とか満たされざる欲望を見ようというのは，その観点からは正しいとし

ても，近世的な色彩が強く反映しており，オランダ人伝説に直接結びつけようというのは早急で我々を説得する力に欠け，直ちには首肯できかねる。もとよりこの伝説に人間の苦悩を認めようとすることに逆らうものではないが，それと伝説の発生とは一応別にして考えたい。ここにあげた二つのギリシャの物語は伝説と内容が類似しているといわれるものの，両者の関係は想像以上に稀薄なのではないだろうか。

ここで注目に値するのは犯した罪とその報いとしての罰との関係で，タンタロスの物語の場合，子供殺しを別にすれば，犯した罪に対して罰が法外に重いという点に昔話の形式を認めることができるが，罪としてあげられているものがいくつもある如く，罪と罰との関係は必然的なものではなく，罪の質がどうあろうともそれは二義的なものであって物語の主題は罰の方に置かれているものと考えられる。これはオデュッセウスの場合にも云えることで，罪はいつまでも罰に投影しておらず，物語を進めるためのエネルギーとなっているにすぎない。

これに比べるとキリスト教関係のいくつかの物語は海の放浪者ならぬ地上の放浪者の物語であるが，犯した罪と罰との関係も我々の納得のゆくもので，その一つは旧約聖書，創世記第四章に記されている，アダムの子，カインとアベルの物語である。

兄のカインは農耕に，弟のアベルは牧畜にたずさわっていたが，カインの捧げた農産物の供物より，アベルの捧げた動物の犠牲の方がヤハヴェに喜ばれたことを怒ったカインはアベルを殺した。人類最初の殺人者としてカインは放浪者となってさまよわねばならぬのである。

農耕民と遊牧民との争いを反映していると考えられるこの物語は，罪と罰についてふれた最古のものの一つであろうが，主は殺されることを恐れるカインに殺されることのないよう，彼に一つの印をつけてやる。ここにキリスト教の原型を見ることができる。最も真の意味における救済宗教としてのキリスト教は，人間を罪，罪責および罰から解放しようとするものである。これのための前提は，人間の救霊の必要とその多かれ少なかれ一般的な罪性とである。勿論このカインの物語は罪の一例としてあげられて

いるのであって，神への裏切りを示す「楽園喪失」に語られる罪の一つの現れにすぎないが，罪——罰——救済という一つの形式をふまえていることに注目してよいだろう。

こうした物語はキリスト教の発達とともに各地に伝わり，その土地に古くから残されている昔話や伝説と融合する可能性が生じてくる。同じようなテーマの物語が，キリスト教の物語の影響をうけて，同化したり変形したりしながらキリスト教的粉飾を経て，新たな物語に生れ変わることは少なくない。しかしそれがキリスト教の精神に基づくものであるかどうかは別の問題である。こうした昔話，あるいは伝説には，発生する場所，時代にそれぞれ適した時代，場所があるという。(4) クローンによれば，昔話発生に適した時代とは，東洋では比較的古い時代，ヨーロッパでは中世がそうで，中世の迷信的な精神，不可解な神秘主義が現実にほとんど注意をはらわない昔話の発生に適した時期であったという。その中世でオランダ人伝説との関係において注目すべき物語が記録されている。さまよえるユダヤ人，あるいは，永遠のユダヤ人と云われる物語である。

アハスヴェルスと呼ばれるこの人は，十字架を担って刑場へゆくイエスを嘲い，またイエスが彼の戸口でしばらく休もうとしたのを拒絶したため，その罰としてキリスト再臨の時まで休息を得ることなく地上をさまよう運命にのろわれたという。

これは1602年，「アハスヴェルスという名のユダヤ人」と題した印刷場所不明のパンフレットにはじめてあらわれたものであるが，まもなくドイツ全土に，さらに国外にも広く知られるようになった。この先駆をなす物語としては1228年，あるいは1235年ともいわれるイギリスのサン・アルバン僧院の記録で，ここではアハスヴェルスはカルタフィルスとなっており，さらに1252年，マティウス・パリスはこの伝説を「ヒストリア・マイヨール」の中に記し，フィリップ・ムスケは1243年頃，「韻文年代記」の中で語っているという。(5) 一説によれば，この物語は7世紀に成立したローマの兵卒マルコの伝説，キリストを打ったためにのろわれて苦難の日々を送らねばならなかったという物語が流れ込んだものであるという。以後永遠

のユダヤ人の物語は民間信仰の中にとり入れられて今日に及び，その間たびたびユダヤ人に会ったという報告が残されており，その範囲はドイツをはじめイタリー，オランダ，ブルターニュ，スペイン，ポルトガルとほとんどヨーロッパ全域に及んでいる。ここではキリストを容易に信じようとしなかったユダヤ人にこと寄せた宗教教育の意図は明らかである。

この物語をオランダ人伝説と比べると，モチーフと語り方が一段と接近し，オランダ人伝説成立のきざしをうかがい知ることができる。両者の語り方は次の如くである。

| オランダ人 | アハスヴェルス |
|---|---|
| 嵐にあう | キリストに会う |
| 神に反抗 | キリストの願いを拒絶 |
| 天上から呪いの声 | キリストの呪いの言葉 |
| 永遠のさすらい | 永遠のさすらい |

ここで今一度ギリシャ神話とアハスヴェルスの物語とを，罪と罰という観点から考察してみよう。

ギリシャ神話では罪なるものの姿が不定であり，罰との必然的関係は薄く，罪よりもむしろ罰の方に焦点が合っているということをすでにのべたが，これとあわせ考えねばならぬのがギリシャの神々のあり方であろう。ギリシャの神々の一つの特徴は，それが時代の推移とともに常に改新されて行ったことにある。詩人は神話や英雄伝説を自分なりに解釈し，物語ったが，神話伝説に最も独創的な解釈を下したのは悲劇であろう。

これは同じエレクトラ伝説をとり扱ったアイスキュロス，ソフォクレス，エウリピデスの三作を比較すれば容易にうかがうことができる。アポロンはエレクトラに父の仇を討つため，実の母の殺害を命じる。この物語を三者はそれぞれの方法で説くのであるが，アポロンの命令を果したあとのオレステスの人間として苦悩を示すエウリピデスの劇と，ホメロスの中に出てくるオレステスのはればれとした仇討とは，同じ物語を扱っていな

がらその相違に驚かざるをえない。しかしアポロンの役割は一貫している。つまり復讐の神である。ギリシャの神々には復讐の神，計略の神，ねたみの神という性格が強く押し出されていることをもう一つの特徴としてあげることができよう。こうした性格は必然的に何らかの結果を生じてくる。ギリシャ劇における「認知」や「逆転」も，新たな結果を生ずるための，すなわち新たな局面を展開するための，きわめて有効な作劇上の技巧といえよう。これらはすべて結果を主んじるという態度のあらわれであって，物語は前向きの方向で進んでゆく。これを罪と罰の問題にあてはめて考えてみると，いかなる罪（原因）があるかを問題としているよりは，いかなる罰（結果）があるかということに注目されているとみてよろしかろう。

これに対してキリスト教では，罪——罰——救済という経過を経るのを定石とし，カインとアベルの物語も，カインの殺人——放浪——恐怖からの解放という経過をたどっている。キリスト教では，罰においても救済においても常に罪ということから逃れることは出来ず，まず問題とされるのが罪であり，罰も救済もその投影の内にあって，いかなる場合も常に罪という根本にもどってゆくと見ることができる。つまりここではギリシャの場合とは逆に，問題の中心は罪にあるとみてよろしい。ギリシャの物語の態度を遠心的と呼ぶとすれば，キリスト教の方は求心的と呼ぶことができる。

これを中世のアハスヴェルスの物語にあてはめて考えると，ここには罪と罰のみ存在して救いの部分が欠けている。これは救済の宗教としてのキリスト教の根本的な理念を欠き，そのきわめて特徴的な点を無視していることにほかならず，かかる物語はキリストを登場させているとはいえ，純粋にキリスト教的物語であると断定するにはいささかためらいがある。カインとアハスヴェルスの間には，罪と放浪という同じテーマはあっても，また物語る態度は同じく救心的ではあっても，物語る精神には差が認められ，両者は本質的には一応無関係とみるべきであると考えられる。すでにのべた記録や文献から，アハスヴェルスの物語の発生を仮りに13世紀はじめとすれば，これは十字軍時代の直接の影響下にあったということになる。

そしてこの際あわせて考えなければならないのがユダヤ人の問題である。ユダヤ人迫害は1096年フランス十字軍によるユダヤ人大量殺害にはじまる。十字軍時代の12世紀のフランス，13世紀のドイツでは，贖罪の犠牲に人を殺してその生血を捧げるという Ritualmord の流言が起り，ユダヤ人迫害の誘因となった。さらに1347年，十字軍のもたらしたペストはヨーロッパ全土に猛威をふるい3,500万の人命を奪ったが，これが群衆心理を刺激し，ユダヤ人が井戸に病毒を投げこむというBrunnenvergiftung の流言がひろがり，ユダヤ人迫害に拍車をかけた。もとよりRitualmord も Brunnenvergiftung も単なる流言にすぎず，キリストを十字架に処したことに対する憎悪，宗教的反目，富に対する嫉妬に起因するものであるが，アハスヴェルスの物語は，かかるユダヤ人にことよせ，ことさらキリストと対立させて世人の恐怖，憎悪をかりたてることにより，宗教教育の一手段として利用せんとしたものであることは明らかである。この物語はキリストを利用したもの，あるいはキリスト教世界を背景としたものであっても，キリスト教的精神の物語ではない．寛大なイエスにして罪に比べて法外に重いこの罰はむしろ反キリスト教的でさえあるが，罪と罰の不釣合は昔話の一形態ととらえることができる。

しかし，オランダ人伝説とこの物語とを比較すれば，物語の構成の類似，語り方の確立にこの物語をオランダ人伝説の先駆と認めることは十分に可能である。けだし中世は魔女の出現や迷信の流行，そしてそれゆえ神罰に対する恐れは非常に強く，この物語の人々に与える影響は現在の我々の想像もつかない強さがあったことと思われる。オランダ人伝説の原型ともいえるこの物語の成立をあえて推定すれば，現存する記録とユダヤ人迫害の歴史的事実から12～13世紀と定めてよく，これをオランダ人伝説の揺籃期とみることができる。しかしこれが伝説として確立するためには長い時間を必要とした。まずこれが海の物語となる必要があったのである。

## 2．海とオランダ人

古代文明における水の需要は大きくまた特別であった。灌漑農耕が進め

ばそれだけ人々の水に対する帰依心は増大し，水は穀物を作り人々の日常生活を支える創造者であると同時に，週期的に洪水をもたらし一切を破壊し去る破壊者でもあった。人々は水の恩恵を感じ崇拝すると同時に恐怖の念をもいだいていた。古代宗教における水の性格は，神聖なものであると同時に呪詛的なものであった。このことは単に内陸地のみに限らず海辺の生活にもあてはまる。海は多くの幸を与えてくれる豊かな海である一方，荒れ狂う恐怖の海でもあった。海岸地方に住む人々は，大しけ，遭難，漂流等，今日とは比較にならぬほどの多くの危険にさらされていたし，従って彼らの海に対する恐怖も今日の想像を絶するものがあったであろう。オランダ人の出現を恐れる船乗りの心理，そしてそれがオランダ人や幽霊船の如き説話の発生を可能にする下地として，こうした海に対する恐怖の念をまず認めなくてはならない。海に出たまま帰らぬ人を思い，さまざまにめぐらす思案にも，あるいは心の安息を求めて耳を傾ける巫女のお告げにも，昔話は発生の可能性を秘めているが，そうした不安を現実に視覚的にあらわすものが難破船や漂流物で，不気味なあるいは無残な難破船や，どこの物ともわからぬ漂流物を前にして，古代人はさまざまなことを想像しまた語り合ったであろう。ここにも昔話発生の萠芽を認めることができる。

昔話の発生をさぐるいろいろな考え方のうちに，これを夢に求めようというものがある。ライストナー (L. Laistner) によって説えられライエン (F. v. d. Leyen)により発展させられたこの説は，古代における夢の予言的呪術的威力に注目し，夢の内容を容易に信じた彼らが，夢をくり返し語ることによって物語が発生する，というものである。(6) こうした現実と非現実との混同，実際にはなかったものがあった如く思われるもう一つの現象で，オランダ人の物語と結びつけて注目する必要のあるものが蜃気楼である。1893年6月14日付ミュンヘンの Neueste Nachrichtenには「海岸湖にさまよえるオランダ人現わる」と題しておよそ次のような記事が記載されている。

海岸湖では14人の漁師が何艘かの船にのって仕事をしていた。午後2

時，風が全くなかったので暑さはきびしく，水平線のあたりはもやに包まれ，船からはかげろうが立ちのぼっていた。突然漁師ははっとした。Pillauの町の方角のそう遠くない地点に，彼らははっきりと2本マストの大きな帆船を認めたのであった。さらにそのうしろに何艘かの船がぼんやりと現れた。彼らはてっきり幽霊船だと思いこんだが，二人の年老いた漁師は，Pilllauの船が写った蜃気楼だと説明した。(7)

蜃気楼，錯覚，見あやまりが幽霊船の伝説に大きく作用していることは確かである。しかしこれは伝説の発生に直接結びつけて考えるだけでなく，むしろこうした現象によって各地に伝わる在来の伝説に装飾が加えられていったということにも考慮がはらわれなければならない。上述のように幽霊船の伝説を生み出す要素はいくつもあるしどこでも起りうる。これとオランダ人伝説と比べれば，前者がより一般的であるのに対し，後者は後述する如く登場人物や場所，およびそれらの歴史的背景においていちぢるしく制限をうけている。幽霊船の伝説をオランダ人伝説の派生と考える人もあるが，むしろ幽霊船の伝説にいろいろな規定が加えられてオランダ人の伝説が成立したとみる方が妥当であろう。

すでに陸の放浪者，永遠のユダヤ人アハスヴェルスにオランダ人の面影を見たが，海の放浪者であるオランダ人に至るには，なお二つの事柄に注目する必要があろう。中世において人々の目を海にむけさせたはなばなしい出来事，すなわち十字軍の遠征と新大陸の発見である。

十字軍の遠征は海を舞台とするいくつかの文学作品を生んだ。ミンネザングの詩人たちは，ヴァルターもナイトハルトもタンホイザーもみな十字軍に参加し，それぞれ十字軍の歌を残している。ヴァルターは厳粛な宗教的な歌，ナイトハルトのは望郷の歌とも云うべきもの，しかしタンホイザーのは十字軍の歌とは云うものの，ナイトハルト同様宗教的な感激も厳粛さも戦闘に対する意欲もなく，その中心をなしているのは海上で遭った嵐の描写である。船は嵐にうたれて岩につき進む，舵はこわれ，帆は飛ばされて海に落ちる，乗組員の悲しみの叫び声が我々の耳にまできこえてくるような写実的な詩である。十字軍遠征の際の船旅の難儀はこうして文学によ

って伝えられるとともに，帰還した兵士の口から人々は直接ききもしたし，各地をめぐる吟遊詩人からもきいた。聖地奪還の宗教的熱望と海上の嵐のすさまじさと放浪の苦しみは，同じ頃アハスヴェルスの物語が語られた時代的背景も考えあわせ，オランダ人伝説の成立に直接関与はしていなくとも，それに必要な素地を築き，陸の放浪者と海の放浪者との出会いが，伝説成立の雰囲気をかもし出したといえよう。

騎士の没落と世の中の荒廃は社会不安を生み，精神的にも不安定な状態が続いた中世末期に，新たな活動的な衝動が人々を襲った。新大陸発見の欲望である。ルネッサンスが近代的人間精神の内面的発展であるとすれば，地理上の発見はヨーロッパ近代社会の外面的拡張である。14世紀はじめの羅針盤の発明は航海術を飛躍的に発達させ，ヨーロッパ近海に限られていた海上の交通は，はるか大洋にまで及ぶに至った。これに拍車をかけたのが，トルコ人の地中海制覇で，インドの産物を渇望していたヨーロッパは東洋との貿易のために新しい航路を必要とし，さらにマルコポーロによる中国と日本の紹介は，ヨーロッパ人の目をアジアへ向けさすのに大いに力あった。そしてインドへの直接貿易のために地理的に最も有利であったのがスペインとポルトガルであった。1492年，コロンブスのアメリカ発見に続き，1494年にはスペイン・ポルトガル両国は植民地分割線を決め，1498年にはヴァスコ・ダ・ガマが喜望峰を回航してインド洋を横断しカルカッタに着く等，両国の活躍はめざましい。

これより少しおくれてオランダは，17世紀はじめにいちじるしい発展をとげた。1601年，オランダ人は喜望峰を占領して東インドへの海路を確保した結果，翌年オランダ東インド会社が設立されて極東の海をその支配下に収めた。1606年にはオランダ人船長によってオーストラリア大陸が，1642年にはタスマニアが発見された。ヨーロッパ内の国と国との交通も主としてオランダ船によって行なわれ，アムステルダムは世界貿易の中心地であった。かくしてオランダ人は海の主人公としてはなばなしい足跡を残すこととなった。東インド会社はネーデルランド連邦の保護をうけ，ポルトガルの多くの植民地を奪いとり，ジャワ島のバタヴィアを貿易の中心地と

した。さらに1621年，西インド会社の設立によって莫大な富が流れ込み，ネーデルランドは着々と発展をとげていった。こういう状態の中で，大胆なオランダ人船長がとかくうわさの種になることは少しも不思議ではない。彼らを支えていたものはカルヴィン教であり，この教えは営利，蓄財などの行為も道徳的であるかぎりにおいて神の恩寵への道であるとした点，近代資本主義の精神と合致し，祭政一致の理想や教会制度の否定，司教不要の説とあいまって，一般には相当に過激なものとうけとられていた。伝説にあらわれる嵐に逆らいながらも喜望峰をまわろうとしたオランダ人の強情さ，積極さは，カルヴィン教を信奉する当時のオランダ人商人の態度と一致する。

こうしてオランダ人伝説の重要な要素とそれをまとめる条件も出そろった。次にいくつかの各地に伝わる伝説をみながら「さまよえるオランダ人」について考察してみよう。

## 3. 「さまよえるオランダ人」の伝説[8]

### 1. Van der Decken の物語

ベルギー領 Gent の北，Terneuse のオランダ人船長 Van der Decken は1600年頃インドへ向けて旅行中，喜望峰をまわろうとして嵐にあい，懸命の努力も徒労に終った。彼は，嵐が吹き荒れようが波が襲いかかろうが，どんなことがあっても岬をまわってみせるぞと誓をたてた。そのとき天上から「最後の審判まで！」という声がきこえた。かくして彼は永遠にさまよい続けなければならぬ運命に見舞われた。彼の船は黒く，帆は赤く，嵐の中でも帆をいっぱいに張って走る。彼の船に出会うことは嵐に会い沈没することを意味しており，船乗りからは非常に恐れられている。

オランダ人伝説として最も典型的な話で，「永遠のユダヤ人」の物語ときわめてよく類似していることはすでに述べたところである。Van der Decken の名はオランダ人を題材とした文学の中にはしばしばあらわれるもので，Vanderdecken と続けて書く場合もある。後に C. Marryat は小

説「さまよえるオランダ人」の中でこの人物をとりあげ，最後に救いを与えている。すなわち Van der Decken の息子が聖遺物をもって現われ，これにふれるや船はその呪いとともに消え失せるのである。黒い船，赤い帆という形容も幽霊船の描写の典型でたびたびでてくるが，これは後からつけ加えられた粉飾であろう。

2. Barend Fokke の物語

17世紀のはじめ，企業心に富むオランダ人の船のり Barend Fokke はバタヴィア(現在のジャカルタ)——オランダ間を走っていたが，片道90日というあまりの速さのために，悪魔と契約した魔法使いと云われていた。彼が港を出たまま帰って来なくなったとき，彼は悪魔の獲食となった罰により，喜望峰とアメリカの南端との間を永遠に往復し，途中の寄港は許されないのだ，とのうわさが流れた。18世紀のインド洋の船のりは皆この船のことを知っていた。夜，このオランダ人の船によびかけられた船は数多くあり，皆その船をはっきりと見た。船上の乗組員は船長，水夫長，料理人，数人の船員，みんな非常に年をとっていて長いひげを生やしていた。彼らに問いかけても答はなく，船はたちまち消えてしまう。この船は日中に現われることもあり，ランチにのってこの船に近づこうとする無謀者も時にはいたが，彼らが船に達すると，船はたちまち消えてしまう。

この物語に続いて舵手の話が伝わっているが，これは主人公が舵手に変っているだけで内容はオランダ人の物語と全く一致している。 Barend Fokke の話とこの舵手の話は一つの物語として語られているが，本来は別々のものであろう。舵手の話にはジャワとスマトラの間のスンダ海峡，クロクトア島，ベシー島という具体的な地名が現われるので，バタヴィアに寄港していたFokke と結びつけて語られたものと思われる。この物語はオランダのジャワ進出を背景としたもので，バタヴィア近くのクイパー島には Fokke の記念碑があり，1811年，イギリスのジャワ征服の際にとり除かれたといわれる。

3. Van Straten の物語

オランダ人船長 Van Straten は神を認めぬ背徳の生活とキリスト教の無視を証明するため，聖金曜日に海にのり出し，ついに海上をさまよわねばならぬ運命となった。喜望峰で嵐に向って進んだ彼の努力はむなしかった。17世紀のオランダの服を着，さびしくマストにもたれている彼に出会うことは危険と破滅を意味した。

4. オルデンブルク[(9)]の民間信仰

さまよえるオランダ人とは嵐が近づくと姿を現わす幽霊船のことである。この船は，およそ目に入るものはすべて黒で，乗組員は見当らず，音もなく近づき船のすぐそばをかすめて通り消えるという。

5. ポンメルン[(10)]に伝わる話

喜望峰の近くで大型の軍艦が近づき砲門から火を吹くのが見える。帆の音がきこるほどにまで近づくのに水音はきこえない。この船は昔，非常な難儀に出会ったとき，無事に航海をするために悪魔に身を売ってしまったのである。ところが後にこのことが負担となり，悪魔との契約を解いたところ，それ以後再び国へ帰ることが出来なくなってしまったのである。

6. イギリスに伝わる話

オランダ人の船とは宝物をいっぱい積んだ船のことで，乗組員は暴動を起し海賊を働いた。その罰として船には悪病が拡がり，どの港からもしめ出され，あてもなくさまよわねばならぬこととなった。この船が現れることは悪いしるしとされている。

これら6篇の伝説のうちに，「オランダ人伝説」という範疇に属するいろいろな物語の重要なモチーフがすべて示されている。すなわち，

1. オランダ人が主人公であること。
2. 喜望峰が何らかの形で登場すること。

3. キリスト教に対する批判があること。

4. 幽霊船が現れること，またこれが不吉の前兆であること。

5. 神の裁き，呪い，悪魔との契約があること。

6. その結果としてのさすらいがあること。

これらのモチーフを歴史的に検討すると1～3，4～6の二つのグループに分けられる。前者はある特定の時代を感じさせるものであり，後者は時代を超越した，あるいは年代的には一層古いところに属するものである。これらはオランダ人伝説では重要なものであるが，特にオランダ人伝説に限って現われるものではなく，伝説の成立を考察する場合のきめ手とはならない。換言すれば，こういう事柄は時代場所に関係なくいつでもどこでも話題となったし，また今後もなりうるものなのである。前者のある特定の時代とは新大陸の発見，宗教改革，オランダの活躍の時代であり，これはオランダ人伝説の成立時期を17世紀はじめとする説に重要な根拠を与えているものと思われ，我々も今までの考察からこの説を容れるに躊躇しないであろう。しかし，地理上の発見といひ宗教改革といひ，これは汎ヨーロッパ的出来事であってひとりオランダだけの出来事ではない。同じような伝説の成立はオランダと同じく海上で活躍したスペインにもポルトガルにもイギリスにも起り得ることなのであるが，この場合なぜ「オランダ人」でなくてはならないのだろうか。この種の話が特にオランダ人船員の中で語り伝えられてきたからだ，とするのはまず否定されなければならない。同じような云い伝えはヨーロッパ沿岸各地に伝えられており，オランダ人の中にだけ生き続けてきたのではないからである。それにもかかわらず今日なおオランダ人という名称が用いられているのは何か特別な意味が付せられているのであろうか。これに関してゴルターは，「さまよえるオランダ人」という表現には本来意味深いものがあったのであろうが段々にこれが消滅し，名前だけが記憶に残り意味が忘れられて行った。こうしたことはこの伝説が我々の手もとに報告されているよりもずっと古いものであることを証明している[(11)]，とのべている。ゴルターのこの説は，「さまよえるオランダ人」を，「幽霊船」と置き換えて読まれるべきものであろう。

伝説が伝説として成立するためには何か特定の人物あるいは物が必要であるが，オランダ人がそんなに古くから登場していたと考えることは歴史的に見ても不可能である。一方，幽霊の特徴の一つは特定の人物と結びつくことである。したがって一般的な幽霊船もオランダ人という特定の人物と結びついてはじめて伝説として成立する。蜃気楼，難破船，不帰の人などにまつわる民間伝承や迷信に基づく幽霊船の話は，記録に残されていないはるか昔のものであろうことは容易に想像される。たしかにオランダ人伝説は呪いの船たる幽霊船の一変形であるが，17世紀以前にはオランダ人と幽霊船とを結びつけたものがなかったのに，ここに至って両者が接近したのは，オランダに占拠された喜望峰，そして一方では海の難所として知られる喜望峰を中心として両者が同じ舞台に登場したこと，次にオランダ人の活躍のはなばなしさが，本来全く関係のない物語までオランダ人の物語のように粉飾して行ったこと，そして幽霊船と不吉の前兆というモチーフまでとり入れ，不吉な前兆を語るときはオランダ人または幽霊船の登場を必要とする一定の形式を生んだことをあげることができよう。
オランダ人の側からは当然歴史の脚光をあびねばならぬ一方，幽霊船の側からは伝説となるための主人公を求めていた時代，両者の要求が一致したのが17世紀のはじめなのである。

## 4. 「幽霊船」の伝説

一口に幽霊船といってもどんな物語が伝わっているのだろうか。次にそのいくつかを紹介しよう。

### 7. 低地ブルターニュに伝わる話

大きな人間と犬とをのせた船がみえる。人間は罪人であり，犬は人間を見張る悪霊である。この呪われた船は世の果てるまで海から海をめぐってゆかねばならぬ。ほかの船が近づこうとすると人間はたちまち消えてしまう。この船に出会ったときは ave maris stella ととなえれば難を免れるが，普通は貝がらが警告を発してくれるので事前にこの船を避けることが

できる。

8.　デンマークの老船員の語る話

一見なにも変ったところのない，しかし乗組員のいない船を時々海上で見かけるがこれは音もなく消えてしまう。これはまもなく同じ場所で船が沈むことを暗示する死の船である。

9.　コンウォールに伝わる話

コンウォールの海岸では難破する前に幽霊船を見ると信じられている。乗組員の姿はたいていはぼんやりしているが，一人の婦人と一匹の犬が見えたこともある。この船はある一定の場所で突然消える。不幸に見舞われる船と同じような形で現われるこの幽霊船には発見者の名にちなみ Jack Harry の光と呼ばれる光が現われるが，これは嵐の前兆である。

10.　コンウォールに伝わる話

コンウォールの海岸である夜見かけぬ船をみた。岸からボートが出され，やっとの思いで船についてみると船には灯がともっている。舵手が船につかまろうとしたとき，船も灯も消えた。翌日，その船はロンドンのネプチューン号で3キロはなれた Gwithian で沈没したものであることがわかった。

11.　東フリースランドに伝わる話

エムデン近くで嵐の夜，港に入ろうとした船が沈んだ。今でも嵐の夜にはその船の沈んだところに青い光がもえる。

12.　ノルマンディに伝わる話

嵐の夜，綱は切れ，帆はぼろぼろ，柱はゆらぐ船がすごい速さで近づいてきた。この船を助けようと出かけた人たちは船の乗組員につかまり，船首にくくりつけられてしまった。岸では女子供がさわいだが船は静まりか

えったままだった。その時1時がなった。すると霧がわき上り，船は乗組員もろとも消えてしまった。

13.　イギリスに伝わる話

ランベルトン船長の船はニューヘヴンを出たまま行方がわからない。残った人々は神に無事を祈った。6月のある日，日没直前のこと，ランベルトンの船が港に近づいてきた。船員も見える。突然船は粉々になり姿を消した。船は沈んだのであった。

こうした幽霊船は単に呪われた船として姿を現わすばかりでなく，これから起る不幸な出来事を予告したり，あるいは船が遭難したことを告げる死の船でもあった。海岸地方に住む人々の間には，彼らに関係のある難破や沈没の話がたくさん伝わっているが，現在東独領に属する北海の島，リューゲン島では，こうした不幸の前兆を特に wafeln と呼んでいる。ここには船が沈むその同じ場所に何日かあるいは何週間か前に wafeln が現われるといういい伝えがある。これは船ばかりでなく，溺死する人や火災にあう家などにも同じことがおこるという。

オランダ人伝説が大きく変貌するのは19世紀に入って文学にとりあげられるようになってからである。ルネッサンスを経験した人間が自己の可能性を信じ，真実を求めての放浪に出発する頃，オランダ人の伝説は成立したが，これと前後してドン・ファンとファウスト博士とが文学史上に登場してくる。この両者が積極的行動派の性格を持っているのは，前者ではティルソ・デ・モリーナ，モリエール，そしてモーツアルト，後者ではマーロウ，レッシング，ゲーテと人を得たおかげであるが，オランダ人の終始受身の消極的な性格は新たな芸術を生む芽とはなり得ず，数多く生れた作品もほとんどが伝説のもつ怪奇性にのみよりどころを求めてそれ以上に発展することはできなかった。19世紀に入ってからこの呪われた船をいかにして救い，不幸をいかにして解決するかが新しい問題として提起された。

そしてほとんどの場合，呪術を解決するに宗教的な絶対力をもってする方法がとられたが，Heineは1833年に発表した「サロン」の中でこの物語をとりあげ，「女性による救済」という新たな道を開拓した。この考えは同じ頃 Edward Fitzball のドラマ The flying Dutchman or the Phantom Ship にもあらわれており，これが Heine の創案かあるいは Fitzball からとったものかが問題とされているが，いずれにせよこれが Wagner の中で実を結び，ほとんど唯一の今日まで観賞に耐えうる作品となった。ゲーテが若い頃永遠のユダヤ人をとりあげはしたが実を結ぶことなく終ってしまったのも，素材のもつ生命力のしからしむるところであろうか。

注 1. Henri Lichtenberger : Richard Wagner s. 66

2. Gustav Ernest : Richard Wagner s. 56

3. オランダ人伝説から直接人間性あるいは芸術家の問題を取り出した説を筆者は知らないが，ヴァーグナーの作品の解釈にはしばしばあらわれるもので，例えば Johannes Bertram はオランダ人とダーラントの登場する第1幕を Begegnung zwischen dem ober- und unterbewußten Menschen とし，第2幕を Das Unterbewußte im Innern des bewußten Menschen とし，第3幕の Die Erlösung に至る過程を説いている。(Johannes Bertram : Mythos Symbol Idee in Richard Wagners Musikdramen. 1957.)

また「タンホイザー」や「ローエングリン」を芸術家の問題を扱っているものとし，その先駆をなす作品として「さまよえるオランダ人」をとらえることはあまねく行なわれているところである。

4. 関敬吾「民話」s. 64

5. バイヤール「伝説の歴史」s. 127

6. 関敬吾「民話」s. 65

7. W. Golther : Die Sage vom fliegenden Holländer (Bayreuther Blätter 1893) s. 316f.

8. ibid., s. 308 ff

9. ブレーメンの西とキールの東にオルデンブルクという地名があるが，ここでは後者の方と思われる。

10. 現在の東独，ロストックの東，バルチック海沿岸地方をいう。

11. W. Golther : Die Sage vom fliegenden Holländer s. 312

12. ibid., s. 314